2015.8
まちの誇り
ぶちきらり

海峡花火大会実行委員会

私たちの生活の中にごく当たり前にある関門海峡。年に1度だけ海峡自らが舞台となり、主役になる日があります。それは8月13日に開催する関門海峡花火大会。今回紹介するのは、同大会を舞台裏で支える「海峡花火大会実行員会」の皆さんです。

あの時、あの場所でやったこと。それが花火。

お盆をふるさとで迎える人たちのため、海峡の素晴らしさを再認識してもらうため、1985(昭和60)年、まちづくり団体である「下関21世紀協会」が母体となり、市内のさまざまな団体と共に、「海峡花火大会実行委員会」を組織し、海峡に浮かべた小舟から花火を打ち上げたのが始まりです。1988(昭和63)年からは、対岸の門司側からも花火が打ち上げられるようになり、両市合同での開催は今年で28回目。今では、日本でも有数の花火大会として評価されるようになりました。主役となる海峡を彩る1万3000発の花火を両岸から支えるのは、実は別々の団体です。決まっているのは、関門海峡花火大会という名前と日程、打ち上げる時間のみ。一体的に見えて全く別々の団体が行っている花火大会は、海峡という一つの舞台で見事に調和しています。

変わらないもの。変わっていくもの。

変わらないものは、あの場所で花火をすること。始めた目的やボランティアで全て支えていること。一方で花火大会の評価や海峡に抱かれた景観、観客が求める要求は加速度的に変わっていく。「当初より規模が拡大し、安全面、環境対策面など要求される諸課題に応じることで精一杯。それでも観客が満足してくれる環境を作り出すためには、それなりの経費が必要です」と大会会長の徳毛伸自さんは苦しい胸の内を語ります。

今回、料金改訂を行うそうですが、全てボランティアといっても相応のサービスが必要になります。警備やごみの問題、観客が求める満足度など、さまざまな問題を解決して運営するためであり、変わっていくことに対応するための必要な経費と言えます。

かけがえのない財産「海峡」を誇りに

「花火の打ち上げは目的ではなく、そこに集うすべての人々が、海峡を誇り、その真価と可能性を共有するための手段。その思いは30年前の当時と変わることなく繋がれています」と話す徳毛さんからは、海峡に対する思いが伝わってきます。

私たちの身近にあるかけがえのない財産「関門海峡」。花火大会を機に、海峡という優れた財産があることの誇りを再認識していただけたらと思います。

①昭和62年の花火大会の様子
②③海峡の夜空と海面を彩る花火
④～⑥花火を支え続けるのは、多くのボランティア。市内にある5大学の学生もボランティアとして参加
⑦実行委員会の皆さん(実行委員長の吉岡さん〈前列左〉と大会会長の徳毛さん〈前列左から2番目〉)